円地文子「蛇の声」論

後藤真子

はじめに

「蛇の声」は雑誌「海」（中央公論社）一九七〇年四月号に掲載された、円地六十五歳の時の作品である。一九六九年一月に発表された「狐火」[1]および一九七〇年一月に発表された「遊魂」[2]と合わせて、『遊魂』の題で単行本が新潮社より刊行された。「狐火」「遊魂」「蛇の声」はいずれも円地自身を彷彿とさせる老女作家を主人公とし、三作品に共通のモチーフを有することから、『遊魂』三連作として扱われている。「蛇の声」の発表当時、文壇からは概ね好評であったが[3]、その後『遊魂』三連作の作品研究は「遊魂」に集中し、「蛇の声」単体で論じた作品論は齊田春菜「円地文子「蛇の声」論――「老女もの」における少女表象――」[4]のみである。

本稿の目的は、「蛇の声」の主題の考察を通して作品の価値を明らかにし、「蛇の声」を円地文学の中に位置づけることである。第一章において、「蛇の声」の素材を特定し、素材に依拠した部分と円地が創作した部分を明らかにする。第二章において、作品の主題を検討する。「蛇の声」における主要なテーマは、老女のセクシュアリティのみならず、老女として存在を軽んじられることに対する反抗であり、生への意志であると論じる。第三章において、「蛇の声」の老女表象を検討する。「蛇の声」中では若さと美しさを結びつける描写が避けられていることから、同時期に書かれた「遊魂」に比して「蛇の声」は後年の円地の所謂〝老女もの〟への軌跡をあらわにしており、円地文学において重要な作品であると論じる。

一「蛇の声」の素材

「蛇の声」は、主人公の老女作家・志賀が、一家心中事件や老女二人のガス心中という新聞の記事から想像する「仮現の光景」を中心に展開する。二つの心中事件は物語世界における現実で起きた事件として設定されており、この二つの事件の背景には、円地が創作の素材としたと思われる実在の事件がある。第一章では、作品の素材となった実在の事件の新聞報道と、作品における事件の設定を比較し、共通点と相違点を洗い出し、円地の創作部分を特定する。円地が創作した部分を明らかにすることで、「蛇の声」において円地が描き出そうとした主

題について考察することが可能になると考える。

一－一　作品の素材：自動車事故の賠償を苦にした一家心中

一－一－一　作品本文と新聞記事の比較

まず、「蛇の声」の冒頭に配される心中事件から、志賀が交通事故被害者の母親と一体となって見る「仮現の光景」の内容までを概説する。

「蛇の声」は、川縁の土手で一家が心中する場面から始まる。交通事故の賠償金の支払いに苦しんだ夫婦は、先に殺した幼い子供たちを抱え、毒入りのジュースをあおって心中を果たす。この場面は、主人公である志賀が、「ひとりのもの思い」の間に見る「仮現の光景」である。志賀の想像は事故被害者の娘の母親に焦点を合わせる。志賀の意識は母親の意識と一体化し、母親が心中した一家の叔父を相手に、賠償金を直談判に行く場面を回想する。法律相談の青年を相手に苦悩をこぼしている過程で、母親の恨みは突然、男を引き寄せる「異形な力」に変わり、母親が青年と情交に及ぶ光景を志賀は想像してしまう。

作品本文には、志賀の想像の起点である事件の概要が示されている。

一家心中、自動車事故の賠償に絶望した夫婦四歳と二歳の二児を殺し自分たちも服毒、妻は下の幼児を背負ったまま川へ落ち、夫と長男は川べりに折重なって死んでいた。妻と二歳の幼女の死体は同夜七時半頃川下の釣船繋留場に流れついていて、舟の持主によって発見された。

三十歳の夫は、一月ばかり前、知人の自動車を借り家族を乗せ近くのN市で運転中、横町で通行中の若い娘を轢き、大腿骨、右足を骨折、片眼を失明させるという大怪我をさせた。被害者側から入院料その他、百数十万円を請求され、親類にも相談してみたが、埒があかず、結局、考えあぐんだ末、妻子にかけてある三十余万円の生命保険を相手方に渡して、許して貰いたいという遺書が、夫の死体の上着のポケットから発見された。

（中略）

Mは大都市Nの隣接地であるK町の金属工場に働く律儀で小心な工員であった。（中略）

被害者のKの母がほど近いN市で繊維製品の下請けの仕事を職業としていたとしても、当然のことだが両者の間には何の関係もなかった。関係は、あの秋晴れの日曜日、Mが友達の車を借りて、N市の動物園のある大公園に妻子をつれてドライヴに行った帰りに起った。

この「蛇の声」作品中の心中事件と同様の事件が一九六八年十月六日に発生し、翌七日の新聞で報道された。「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」を確認したところ、三紙すべてが当該心中事件を報道しているが、最も詳細で、「蛇の声」における内容と類似するのは「朝日新聞」の記事である。

（「朝日新聞」一九六八年一〇月七日　東京　夕刊　一一面）

※太字は見出し

二四万円の治療費が払えず

被害者に死のおわび　犬山の親子心中

六日夜、愛知県犬山市内の木曽川で起きた一家四人心中は、小学校二年の長女が助けられただけで、残る三人、夫婦と小学校一年の次女は七日朝、水死体で発見された。夫が酔っぱらって軽乗用車を無免許運転、はねた高校生の治療費二十四万余円の支払いに困り果てたためと分った。

飲酒運転で女高生をはねて

【犬山＝愛知県】六日午後十時ごろ、犬山市北白山平の木曽川左岸で起きた春日井市味美中新町四七〇三名古屋タイル工事会社社宅内、服部敏夫さん（三六）親子の心中について犬山署は助かった服部さんの長女春日井市立白山小学校二年美紀ちゃん（八つ）から事情を聞いたところ、服部さんと妻みつ子さん（三八）と次女の真由美ちゃん（六つ）＝白山小学校一年＝の一家四人で、取水口付近から四人で入水自殺したとわかった。

同署員が現場付近を調べたところ、取入口のコンクリートの上にあったハンドバッグの中には便せん数枚があり、このうち一枚には「……二回目の治療費として二十四万二千円を請求されてびっくりした。こんなにもかかるのなら死んだほうがましだ。片桐さんには悪いが、死んでおわびをする。私たちの生命保険を治療費にまわして下さい」という意味の敏夫さんの両親あての遺書が書かれてあり、同署は交通事故の補償を苦に一家心中をはかったとみている。敏夫さんら三人は七日午前六時半、水死体で見つかった。

服部さん一家は四日から家を出たらしく、びわ湖博覧会を見たあと、琵琶湖で死のうとしたが死にきれずこの日、日本ライン下りや遊園地などで遊んだあと、敏夫さんは「治療費を払わなければならないし、暮らしていけないから水に入ろう」といったという。

服部さんの月収は手取り三～四万円程度だった。

名古屋北署の調べでは、服部さんは九月十九日午後七時頃、名古屋市北区楠町味鋺の市道で、酒に酔ったうえ無免許で軽乗用車を運転、自転車に乗っていた近くの名古屋市立北高校三年、片桐敬子さん（一八）をはねて頭などに二カ月の重傷を負わせたという。

敏夫さんの父親服部富雄さん（六〇）＝名古屋市中村区城屋敷町二丁目＝の話　敏夫が交通事故を起こした一週間ほどあと、わたしのところへ来て相手の人に払う金がない。どうにかしてくれないかといっていた。わたしも収入が少なく、父親として何とかしてやりたかったが、その時二日分の医者代六万六百円を渡してやるのが精いっぱいでした。

「死ぬのは無責任」

片桐敬子さんの母親　ミシンの阿さ子さん（三八）の話　内職をして女手ひとつで育てて来た長女の敬子にひどいけがをさせておきながら死んでしまうとは無責任な話です。まだ治療費も服部さんは二日分しか払わず、あとの十日分の治療費二十四万余円の請

求書を持ったまま、四日から姿を消してしまっていた。

上記三紙で、心中した夫の父親と事故被害者の母親のインタビューが掲載されているのはこの「朝日新聞」の記事のみであった。「蛇の声」で前半の主軸となるのは事故被害者の母親（「朝日新聞」記事の「片桐敬子さんの母親　ミシンの阿さ子さん」にあたる）であり、この母親が心中した一家の叔父に治療費を出すように直談判に行く場面があることから、円地は「朝日新聞」の当該記事を読み、作品の素材とした可能性が高いと思われる。

一－一－二　共通点と相違点、創作部分

「蛇の声」における事件の内容と、実在の事件との共通点・相違点を詳しく検討し、円地の創作部分を特定する。

心中事件の共通点としては、夫婦と子供二人の家族であったこと、交通事故の補償金が原因であること、遺書があり、生命保険を事故被害者に渡してほしい旨があること、が指摘できる。また、心中事件の発生は新聞報道によると十月六日であり、作中の心中事件の日時は明らかでないが、心中場面の空の描写に「晩秋の朱色」という表現があることから秋である。報道によると交通事故は九月十九日に発生しており、「蛇の声」における交通事故も「秋晴れの日曜日」に発生していて、季節が一致している。交通事故の共通点としては、名古屋市（作中では大都市N市と表記）で発生したこと、心中した男性は父親（作中では親類）に相談したが金の工面が出来なかったこと、が指摘できる。事故被害者の娘とその母親に関しては、事故被害者が高校三年生の女子片桐敬子さん（作中ではKと表記）であること、母親はミシンの内職をしていること、母子家庭であることが指摘できる。また、新聞記事の「死んでしまうとは無責任な話です」という言葉は、作中で母親が心中した一家の叔父に向かって「死んで行った人たちは気の毒だというけれども、責任を果たされないで残されたこちらの立場はどうなるというんでしょう」と詰る言葉に似通っている。以上から、実在の心中事件・交通事故と作中の事件事故の大枠に相違なく、特に事故被害者の母親の造型は「朝日新聞」に報じられている母親の情報と一致していることがわかる。実在の事件が「蛇の声」の素材として用いられることで、作品において一定のリアリズムが担保されているといえよう。

次に相違点を検討していく。実在の事件においては、心中したのは夫婦と小学二年生の長女、小学一年生の次女の一家四人で、長女は助かっている。一方作中で心中したのは夫婦と、四歳の長男、二歳の長女で、四人全員が死亡している。自殺手段も、実在の事件では入水自殺だったのが、作中では服毒自殺に変更されている。また、自動車事故に関しては、実際は男性が無免許飲酒運転で起こした事故だが、作中では日曜に家族で動物園のある大公園に行った帰りに起きた事故とされている。実際の新聞報道では「頭などに二カ月の重傷」とのみ報道されているが、作中では「大腿骨、右足を骨折、片眼を失明させるという大怪我」と変更され、それに伴い医療費も高額に変更されている。実際の新聞報道では「二日分の医者代六万六百円」は男性の父親

が出し、「二回目の治療費二十四万二千円」を請求されたとあるが、作中では「入院料その他、百数十万円」を請求されたとなっている。まとめると、「蛇の声」内の心中事件では、子供の年齢を引き下げ、一家全員が死亡と、より悲惨な方向へ脚色されている。また交通事故に関しては、無免許飲酒運転という重大な過失を取り除いて偶然性を強調し、また家族での行楽帰りの事故に変えることで一家に善良さを付加している。加害者家族を悪者にせず、憐れみを催させる描写を作品冒頭に配することで、それに続く事故被害者の母親の怒りや恨みのやり場のなさを効果的に演出していると言える。なお、細かい相違点として、心中した男性の勤務先が春日市の名古屋タイル工事会社から「K町の金属工場」に変更されている点、心中事件の管轄が犬山署からO署に変更されている点がある。

円地の完全な創作と言えるのは、心中した一家の叔父に事故被害者の母親が賠償金の直談判に行く場面と、母親の法律相談に乗る青年Sである。作中の叔父は、事故被害者に対してお金を払うことを断固として拒否し、母親を追いつめていく存在である。ただしこの叔父は、「朝日新聞」の当該記事にインタビューが掲載されている心中した男性の父親を素材にしているとも考えられる。法律相談の青年は、母親と同じアパートに住む大学院生で、法律事務所へアルバイトに通っている。この青年が、やり場のない怒りに身を焼く母親の「呪術に誘い入れられ」、母親を抱きよせる。『遊魂』三連作を通じて、主人公となる老女の若い男に対する性的欲望と葛藤が重要な要素の一つとなっていることから、青年Sは老女の性愛というテーマを描くにあたり必要な創作だったと言える。逆に、人物を新たに登場させて描くほど、老女のセクシュアリティが円地にとっても重要なテーマであることが、実際の新聞報道と「蛇の声」の比較を通して裏づけられた。

一-二　作品の素材：病母と老いた娘の心中

自動車事故による心中事件から、事故被害者の母親の憤りを想像し、母親が青年と交わるところを思いがけず想像してしまった志賀が一度もの思いからさめ、再び想像する「仮現の光景」は、年老いた母娘が農薬を飲んで死に至る心中事件である。本節では、この心中事件の素材となったと思われる実在の事件の新聞記事と、作品中の事件について比較検討する。

一-二-一　作品本文と新聞記事の比較

「蛇の声」における心中事件と最も内容が近いのは、一九七〇年一月二十一日に報道された、[5] 八十六歳と五十八歳の母娘の死亡事件である。「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」のうち、「読売新聞」には記事がなく、「朝日新聞」「毎日新聞」に報じられた記事を引用する。

（「朝日新聞」一九七〇年一月二十一日　東京　夕刊　一〇面）
※太字は見出し

だれも気付かぬまま病身の母娘が衰弱死　横浜

【横浜】二十一日朝、横浜市内でからだの不自由な八十六歳の母親と心臓の悪い五十八歳の娘が死体で発見された。警察の調べで

はいまのところ心中ではないらしく、どちらかが病死したあと残された方も衰弱し切って助けを求めることも出来ず死んでいったのではないかという。生活が苦しく、だれにもみとられずに死んでいった老女二人――ここにも都会の谷間がポッカリ穴をあけていた。

同日午前八時十分ごろ、同市南区南吉田町五ノ四七無職中島ナツさん（八六）方の戸が二、三日前からしめ切ったままになっていて様子がおかしいと隣の人から横浜・寿署に届けがあった。同署で調べたところ六畳間のふとんの上にナツさんと実の娘の無職前田千枝さん（五八）が死んでいた。

近所の人の話によると、ナツさんは千枝さんを連れて戦前、同町の菓子店に後妻にきたが、終戦直前、主人に先立たれ、その後千枝さんも嫁に行かず、テレビもない六畳間でここ二十年間、二人きりの暮しを続けてきた。収入は家の一部を人に貸して得る四千円と時折りの和裁内職だけ。千枝さんが近くの米屋さんに勤めたこともあったが、二人の生活はひどく困っていたらしく、見かねて昨年八月、地元の人や民生委員が生活保護を受けることをすすめたが、ナツさんは昔気質の人で「お国に迷惑をかけるような不名誉なことはできない」と断ったという。

民生委員の三木正一さん（七〇）は「なんとか二人を説き伏せて保護を受けさせるべきだった」と悔んでいた。

（毎日新聞　一九七〇年一月二十一日　東京　夕刊　九面）

※太字は見出し

年老いた母娘死ぬ

心中、中毒死？

【横浜】二十一日午前八時十分ごろ、横浜市南区南吉田町五の四五、無職、中村キソさん（七五）が「隣家の中島さん方がここ二、三日戸を締切り様子が変だ」と寿署に届け出た。調べたところ、ふとんの上で中島ナツさん（八六）と娘の前田千枝さん（五八）が死んでいた。

二人に外傷がないうえ、玄関や窓には中からカギがかかっており、火ばちに燃え残った炭火が残っているところから一酸化炭素中毒による事故とみているが、自殺の疑いもあり、死体を解剖する。

一－二－二　共通点と相違点、創作部分

「朝日新聞」と「毎日新聞」の報道を比較すると、死因を「朝日新聞」は「いまのところ心中ではない」「衰弱死」として報道しているが、「毎日新聞」では「一酸化炭素中毒による事故」と報じ、「自殺の疑い」もあるとしている。一方、「蛇の声」において、志賀が見ていたのは「八十二歳の母と五十八歳の娘の生活保護を拒んでガス心中した」というある日の新聞の社会記事である。「ガス心中」という言葉は、「毎日新聞」の「一酸化炭素中毒による事故」という報道と近く、円地が「毎日新聞」も見ていた可能性は捨てきれない。一方、「蛇の声」にある「生活保護を拒んで」という内容は、「朝日新聞」で報じられている。

「朝日新聞」に、「地元の人や民生委員が生活保護を受けることをすすめたが、ナツさんは昔気質の人で「お国に迷惑をかけるような不名誉なことはできない」と断ったという」とあるのは、「蛇の声」で「生活保護施設の世話をうけては」と母娘が暮らす敷地内の寺の住職と民生委員が一緒に勧めるが、娘が「母が昔者でございますので、お上のお世話になって生きているのは相すまぬと申してどうしても承知いたしませんから……」と断ることに類似する。また、「朝日新聞」で報じられている「身体不自由」の母親と「心臓の悪い」娘という点も作中の母親と娘の特徴に一致する。「蛇の声」の母親は、脳卒中で半身不随になり、娘も心臓を悪くして時折発作を起こしている。そのほか、和装内職をしていたこと、生活が苦しかったことも共通している。また、二紙で「戸が二、三日前からしめ切ったまま」「ここ二、三日戸を締切り」とあるのは、「蛇の声」で「雨戸が閉じたままで、入り口の鍵もかかっている」と類似している。さらに、年齢が実在の事件では「八十六歳の母と五十八歳の娘」だったが、作中では「八十二歳の母と五十八歳の娘」とほぼ同じである。以上の共通・類似の点から、円地が少なくとも「朝日新聞」の当該記事を読み、作品の素材とした可能性は高いと思われる。

次に相違点に関して検討する。最大の相違点は、母娘の結婚歴であろう。「朝日新聞」の報道によると、「ナツさんは千枝さんを連れて戦前、同町の菓子店に後妻にきたが、終戦直前、主人に先立たれ、その後千枝さんも嫁に行かず」とあり、結婚（再婚）したのは母親で、娘は未婚だったことがわかる。一方、「蛇の声」においては、娘は「会社員の夫と結婚し」、「夫は養子として入籍されたが、数年の後、戦争中、社命で中国から南方へ行き、向うでマラリアを悪化させて、客死した」とある。作中において、娘は結婚後「性交にも不十分であるし、子供の出来る身体でない」ことが明らかになるが、夫は娘を離縁せず、母親と関係を持つのである。この母―娘―娘婿の三角関係は、『遊魂』三連作すべてで登場する関係性であり、円地はこの異様な関係性を描くために、母親の再婚を娘の結婚に改変したと考えられる。この他、細かな相違点として、「朝日新聞」では母娘の収入に「家の一部を人に貸して得る四千円と時折りの和裁内職」とあるのに、「蛇の声」では家賃収入への言及がない。円地は、娘の和裁の仕立物のみで生計を立てているという設定にすることで、「よくあんな生活に耐えられる」と言われるような差し迫った暮らしを描き出している。

実在の事件の報道になく、円地の創作である部分は、先にも少し触れた母親と娘婿が肉体関係を持つ点と、母娘に対する生活保護の勧めの裏に、幼稚園建設の為に母娘を立ち退かせたいという事情を設定した点である。前者は、第一節で検討した心中事件における法律青年の創作と同様、老女のセクシュアリティという主題を描く為に必要な創作であるといえる。後者は、母娘をより窮地に追い込み、母娘が「世間に対して自分たちを閉め出している母子の辿って行く片意地な道」を描くために必要とした創作であると考えられる。

以上、素材となった新聞記事との対照から、円地の改変・創作部分が、『遊魂』三連作で繰り返し描かれる老女の抑圧されたセクシュアリティの回復を描くための創作と、老女たちを窮地に追い込み、憎しみ

や憤りを印象づけるための創作の二点であることを確認した。

前者については、「蛇の声」の同時代評も「人間関係の地獄」[6]「性的な暗闘のグロテスクな図絵」[7]を描き出している点に集まっており、老女のセクシュアリティが「蛇の声」の主題の一つであることは争えない。菊池章一が「母娘の関係の幻想＝想像」に「現実に抑圧された志賀の性の意識がある」[8]と指摘したように、志賀の娘婿に対する性的欲望が、想像の光景となっていると考えられよう。これは、「遊魂」の主人公の二人の若い男への性的欲望が、生き霊のようなものとなって若い男と幻想的な時空で戯れることにより表出することに類似し、『遊魂』三連作共通の主題と言える。一方、「蛇の声」においては、前述のように実在の事件よりも被害の程度を大きくしたり、困窮した生活ぶりを強調したりするなど、老女の世間に対する孤絶感・無力感を印象づける設定や描写も見受けられる。逼迫した老女たちの苦悩や憎しみにも焦点が当てられている点は、『遊魂』三連作内における「蛇の声」の特徴と言えるだろう。

二「蛇の声」の主題

本章では、「仮現の光景」に登場する老女たちの憎しみや憤りの分析を通し、「蛇の声」の主題を考察する。第一節および第二節では、老女たちの女性性の回復の背景には憎悪があることを指摘し、彼女たちの憎悪の対象について論じる。第三節では、経済的には恵まれている志賀が抱く「贅沢なひもじさ」という感情について分析し、志賀自身の老いの自覚に対する無意識の抵抗が、「仮現の光景」の老女たちにも通底し、「蛇の声」の主題をなすことを論じる。

二－一　事故被害者の母親の憎悪

まず、事故被害者の母親を中心とした「仮現の光景」における母親の心理を検討する。事故加害者家族が心中したことで、加害者の親族は被害者の母親を一家を死に追いやったとして責め、補償金の支払いを拒んでいる。すなわち、一家の心中はむしろ被害者の母親をさらに追いつめる結果となったのである。被害者の若い娘は事故により足を骨折し、顔に損傷を負い片眼を失明する。その母親は未亡人で、服飾の下請け仕事をして一人娘を女手一つで育ててきた。その母親の意識に志賀は同化している。母親は法律相談にのっている青年に恨みをぶつけている最中、突如「おばさんの着物を脱ぎすて」、優雅な微笑で青年と交わる。母親をそうさせたものは、「憤りと恨みと、憎しみと悲しみ」「やり場のない鬱積したもの」「ひとりのうちに凝り、ひとに分けられない烈しい切ないもの」といった強烈な負の感情であり、この憎悪が「異形な力」「思いがけない強引な力」となって男を引き寄せたのだと、志賀は考える。すなわち、母親は男を欲していたのではなく、「死のうにも死ねない身の上」で「死を超えようとして、あがく」からこそ、呪術が発生したのである。

母親の憎しみは、単に賠償金の支払いを拒む加害者遺族へのものだけではない。母親は青年に、

「分かっているんですよね。誰もかれも、わかっていて手がつけられないんですよ。結局は私のことを諦めの悪い困った婆さんだと思っているんです」

「だから、可哀そうな目にあったものは誰も構ってくれないんですね。そのくらいのこと、私はさんざん苦労して、よくわかりぬいていた筈なのに、やっぱり、他のものを信じていた……馬鹿だった……（後略）」

と憤懣をぶつけており、「自分を助けてくれるものは何にもありはしないのだという実感」を強く抱いている。この、世間一般に対する孤絶感や、自分を追いつめるものに対する憤りは、次に志賀の見る、病母と老いた娘の抱く憎悪にも共通する。

二－二　病母と老いた娘の憎悪

志賀の想像する「仮現の光景」の二つ目は、寝たきりの八十過ぎの老女と、年老いた娘の心中事件である。娘はかつて結婚し夫がいたが、結婚してはじめて娘は女性の機能に問題があることが分かった。夫の離縁は当然の権利であったが、夫は離縁することなく家に留まった。それは娘の母親にひきこまれたからだと、娘は想像する。

お母さんは、（中略）唯、私を抱えて、思い悩んでいたのかもしれない。そういうお母さんの、花がいっぱい咲き満ちて今にも散りこぼれそうな女ぶりにあの人（娘の亡夫：引用者注）がひきこまれてしまったのかも知れない。

娘の生理の異常に気づかなかったことは母親の不注意とされ、子供の出来る身体でないことが明らかになった自分を抱えて、母親は途方に暮れていたのだろうと娘は想像する。ここで確認しておきたいのは、母親がはじめから性的欲望を持って婿をひきよせたのではないという点である。事故被害者の母親同様、追いつめられやり場のない想いが、男をひきよせるという構図を志賀の「仮現の光景」は描いている。

娘と母親は娘婿が亡くなったあとも二人で長い時間を生きてきたが、その間にお互いに対し、また世間に対し憎悪を募らせている。娘の憎悪は、母親の女性性と、自分たちを追いつめる他者に対して向けられる。

母娘が暮らす家の大家でもある住職は、生活保護施設への入居を勧めるが、その裏には母娘を立ち退かせて幼稚園を作るという思惑がある。その話を聞いた母親の不安は恐怖に変わる。

娘はその母親のとり乱した顔にはたきつけたいほど昂って来る憤りを覚えた。奇妙な性の匂いが涸れはてた筈の肉体に漾泳するのを、かじかんだ娘の心は敏感に嗅ぎわけ憎むのだ。住む場所をなくすぐらいのことが、それほど恐ろしいのか、眼の前に現在の娘がもっと恐ろしいことを何度となく考え、実行に移しかけたことさえあるのを、この老いた女は見ぬく力さえないのであろうか。（中略）

「大丈夫よ、お母さん、私、お母さんを、この海の音の聞える砂地の風の吹く家から決して、他所へなんか移しはしませんよ。どんなにあの和尚さんが頼んで来たって、市の偉方とかいう人を雇って来たって、ちゃんと家賃を払って来た家を、そんなに簡単に逐出されてたまるものですか。逐出されはしません。私たちは弱いんだし、誰も力にしてはいないから、いつでも、押しつぶそうと思えばつぶせる生きものだと皆は思っているんです。でもね、人間二人はそう簡単に押しつぶせるものでもないし、殺せるものでもないんですよ。殺したって、殺しきれないもののあることを私は知っていますもの。見ていらっしゃい、お母さん」

引用部に見られるように、娘は母親の「奇妙な性の匂い」に憎悪を感じる。母親の女性性に対して憎しみを抱く場面は、娘の夫の死後、母親に対して再婚の話が出た場面においても描写される。この憎しみは、娘が性的に不完全であることに起因するだろう。一方で、娘の憎悪は、生活保護を理由に母娘を立ち退かせたい寺の住職や、「押しつぶそうと思えばつぶせる生きもの」と母娘を見なす「皆」にも向けられている。そうであるからこそ、娘は半身不随の母を看病しながら強い意志で働くのであり、凄絶な心中を遂げるのである。

二－三　志賀の「贅沢なひもじさ」と作品の主題

第一節でみた事故被害者の母親と、第二節の病母と老いた娘の二つの「仮現の光景」に共通する内容は、経済的困窮と、自分たちを追いつめる周囲の者に対する憎しみである。一方で、志賀の現実の生活は、「仮現の光景」に見る老女たちの生活とは大きく異なっている。志賀は作家業で自分の生活のみならず娘夫婦の経済的援助もしているため、「仮現の光景」の母娘のような経済的困窮とは現在縁遠い状況にある。

しかし、老いを自覚する志賀は、すべての欲望が滅し枯淡の境地に至っているわけではない。

「私は今、何にも要りはしない。何を持っていたって、どこへ行って見たって、私の今身体と心に溢れている手のつけられないやりきれなさがどうなるというんだろう」

志賀は、そうひとりごとを言いながら、暖房のほどほどにきいた部屋の机の前にぼんやり坐って、贅沢なひもじさに心を渇かしていた。

贅沢なひもじさとは日々の家計に心を砕いている人々から見た外観だけのことで、志賀自身の萎えた身体の肉をもみ、骨を噛むひもじさは、ビアフラの飢餓状態で僅かの食糧を幼い子の手からもぎとる母親とどれほどの違いがあろうか。

本節では、志賀の「やりきれなさ」「贅沢なひもじさ」とは何か、それが「仮現の光景」の老女たちにどのように反映されているのかを検討する。

『遊魂』三連作を踏まえると、志賀の「やりきれなさ」「贅沢なひもじさ」は、老いて女として見られなくなった志賀の、抑圧された性的

欲望であるように思われる。「狐火」「遊魂」では一貫して、若い恋人と娘婿に対する性愛と葛藤が主題となっていた。

しかし、「蛇の声」と「狐火」「遊魂」との間には大きな相違点が二つ存在する。一つは、老女の恋人であった娘の元婚約者が「蛇の声」には登場しないことである。恋人の不在により、老女自身の性愛と葛藤という主題は、「蛇の声」において影を薄くしている。もう一つは、「狐火」「遊魂」ではつながっていた娘との「臍の緒」が、「狐火」では切れていることである。「臍の緒」は『遊魂』三連作に共通のモチーフの一つであり、齊田春菜は、

> 切れることのなかった「狐火」の志緒、「遊魂」の蘇芳は「娘婿―娘―自分」という奇妙な関係に捕らわれたままであるが、「蛇の声」の志賀は娘・久美との「臍の緒」が切れることでこの関係から切り離される。その結果、志賀は新聞記事から想起した別の物語を紡ぎだす能力、そして藤田嗣治の少女の絵画と話をする力を手に入れるようになっていく。(9)

と指摘する。志賀は現実の母娘関係から切り離され広い視野を獲得する一方で、「自分では果たせない欲望の、娘の身体を通してひろがり、花咲くのを意識して微笑むことが出来た」という、「遊魂」の主人公が得ていた満足を失うことになっているのではないだろうか。(引用部は「しかし、その微笑が、他目には世にもはかなげな空しいものに見えることを蘇芳は知らない。」と続く。)

志賀は娘と繋がっていた「臍の緒」が切れ、娘との一体感も失っている。娘との「臍の緒」が無くなった今、「娘婿―娘―自分」という三角関係は「娘婿―娘／自分」に形を変えている。

> 恒也をわるい男に見立てることが、そうして、久美をそのかけている罠に落ちている獲物に見立てることが、今の志賀には一番すっきり割りきれる結論であった。しかし、事実が一向そうでないことが志賀を一層、陰鬱にし、(中略)志賀は、まざまざと、生きた人間の生活している姿を見たり、時にその中に自分もまぎれ込んで動きまわったり、のりうつったりしていた。

恒也を、自分と娘をだましている敵と見なせば、娘を支える母親として共同戦線をはり、再び娘と一体感を持つことができる。しかしそれは志賀の孤独感が裏返しになった妄想であって、婿の恒也は世渡り下手で誠実な男である。志賀は、財産の管理を一切委ねることができ、猛々しい娘も安心して任せられる娘婿への信頼を繰り返し確かめながら、「まるで未成年者のような自分の無防備な信頼感」を「ひどく、理に合わぬ、憎らしいものに感じ」てしまう。成人し信頼の置ける夫を持つ娘にとって、母親の志賀は必要とされる存在ではなくなっており、逆に志賀自身が「未成年者のよう」に面倒を見られる立場となったことに対して、志賀は憤りを感じているのではないだろうか。志賀は、「どうせ、あの人たちはもう私がいつ死んでもなんとかなると思っているのよ」とつぶやいてみないではいられない。娘夫婦が実際にはその

ように思っていないことを理解していながら、「あの人たちはもう私がいつ死んでもなんとかなると思っている」とつぶやく志賀の心のうちには、自分が「いつ死んでもいい」存在になってしまっていることに対する空虚さがある。志賀の「やりきれなさ」「贅沢なひもじさ」の端緒はここにあり、財産を整理し、必要ない存在になってしまったと志賀は自覚しているのだが、自身で自覚している老いと、老いに伴い自己の存在が軽くなることに対してはしかし、無意識のうちに反発しているのではないだろうか。そしてこの志賀の意識・無意識は「仮現の光景」に投影されているのである。

先に確認したように、事故被害者の母親は、「可哀そうな目にあったものは誰も構ってくれない」「自分を助けてくれるものは何にもありはしないのだ」という憤りを抱えていた。「誰も構ってくれない」というのは、もはや娘にも必要とされなくなった志賀の実感であり、心臓の発作が起きても人に助けを求めようと思わなくなった志賀の孤独感を反映していよう。また、「語り合い憎み合い、戦いつづけながら、二人が一つのものにからみあって」生きる母娘の有様は、自分の存在を求めてくれる娘のような存在を欲する志賀の、無意識の欲望の裏返しではないだろうか。さらに、「いつ死んでもいい」存在になったという志賀の自覚は、「押しつぶそうと思えばつぶせる生きもの」だと周囲に見なされているという老娘の意識に通底しているだろう。老娘の「でもね、人間二人はそう簡単に押しつぶせるものでもないし、殺せるものでもないんですよ」という言葉は、老女の生を軽んじる者への志賀の抵抗の言葉でもある。

つまり、志賀の「やりきれなさ」「贅沢なひもじさ」とは、老いて娘にも必要とされなくなった志賀の孤独であり、「いつ死んでもいい」という志賀自身の表面的な自覚に対しての無意識の抵抗であると言える。

以上から、「蛇の声」の主題は従来言われているような老女のセクシュアリティにとどまらず、老女たちの生き方にまで及ぶだろう。「仮現の光景」を通じて丹念に描かれる老女たちの憎しみは、老いた女の存在を軽んじる者への反抗であり、この憎しみが生きることへの欲求を生み出すと言える。老女たちの凄まじい憎悪や死に様は、老女たちが尊厳を持って生きるための戦いとも読めるだろう。

三「蛇の声」の老女表象

マジュール・ポリーヌは、『遊魂』三連作など三人称の幻想的な作品について「自分の抑圧された欲望が、ある神秘的な作用によって、実現される方向で物語は展開する」と述べている。[10]『遊魂』三連作に共通する「抑圧された欲望」とは、老女の女性性の回復であり、具体的には娘婿や、「狐火」「遊魂」においては娘の元婚約者への性愛である。しかし第二章で検討したように、「蛇の声」の作品の主要素は、老女のセクシュアリティだけでなく、自己の存在が軽く扱われることに対する老女の憤りにもあると考えられる。「蛇の声」は、幻想の中という限定的な条件下ではあるが、志賀の内に抑圧された恨みや欲望を表出させているのである。

本章では、「蛇の声」における老女の表象について検討する。齊田春

菜は「蛇の声」における少女表象に着目し、少女が「成人した女になったり、時に老女に化けたり」し、「老婆のような声」と表現されること、および物語終盤の「無染の歌」の検討から、老女と少女のイメージが重ね合わせられていると指摘し、「「老い」と「若さ」（幼さ）の揺らぎでもテクストが構成されている」と述べている。[11] しかし、老女と少女が重ね合わせられていることを指摘するにとどまり、それによって「蛇の声」をどのように解釈することが可能となるのかについては述べていない。

また、倉田容子は「蛇の声」発表から五年後の「彩霧」において、老いた体ながら猶美しい独特の老女を登場させ、主人公の老女もまた老いた自身を美しく眺めるという恍惚状態によって、「〈若さ〉＝美／〈老い〉＝醜」という既成概念が揺らいでいると論じている。[12] そこで、倉田の論をもとに、「蛇の声」の老女の表象についても検討を加えたい。

「蛇の声」で重要になる老女は、A志賀、B自動車事故被害者の母親、C寝たきりの母親、Dその娘の四人である。このうちＡＢＣの人物に対する具体的な表現を検討したい。

A志賀の表象

娘を自動車事故で片眼にした母親のように、時として、凝集した憎悪が巫力に変じるかと見えた瞬間、突然、十数年も忘れていた女が彼女に襲いかかって来るような変化も、志賀は自分の現し身を見失わないままに身体に受け止めることが出来ることを信じた。それは恐ろしい現実であると同時に死と紙一重に密接し、時にお互いそれを越えようとして闘いでいる性を新たに知ることでもあった。片方の胸を死の圧力に縮め、片方の胸を性の奔騰にどよめかせて、志賀は若女の面をかけた老人の舞い手のようによろめきながら、窈窕とはなやぐ自分を机の上に両肘をついて、うつらうつらしながら、恰も、晩秋の暮色の山々の薄墨色をにじませて消えては浮び、浮んでは消えて行く、くらく美しい虹のように眺め入るのであった。

B自動車事故被害者の母親

「おばさん、何笑ってるんだ」

Sは驚いたように言った。

前にきっちり、コールテンのズボンの膝を揃えて自分を見つめる……というよりも睨めつけるように坐っていた母親の肩が自然に丸く凪いで、口もとに仄かな笑いが漂っているのを見たからであった。おや、この顔は誰かに似ていると思ったとき、Sはふと、消えていた記憶をさぐり当てて慌てた。この母親は一体何歳だったのか。娘の怪我の前にも、口をきくことはあったし、この事件の後には、何度となく逢っているが、Sは彼女をおばさんという呼名以外にはみ出して感じたことがなかったことを今気づいた。おばさんの笑いとも言えない微かな口もとのゆるみにSは二、三年前、家庭教師に通っていた家の年上の婦人の顔を思い出していた。Sにはじめて性を教えたその夫人は優雅な容貌と姿態の持主であったし、おばさんは、女という意識をSから忘れさせるの

にまことに便利な粗雑な誠実さを露骨にみせていつも荒い立居に狭い部屋の中を一層狭くするように動きまわっていた。だのにどうして、この、こりこり肉のかたそうな赤ら顔のきつい眼尻に皺をいく筋も畳みこんだおばさんの顔にあの優雅な夫人の微笑が忍びこんだものであろう。

（中略）

母親はそういいながら、やっぱり口もとをゆるめた顔でうっとりしている。人に言葉で伝えることも出来ない。行為でやってのけることも出来ない。憤りと恨みと、憎しみと悲しみとが、ひとりの身体のうちにのたうち煮凝ったものが異形な力へ変って行く道で、母親は突然おばさんの着物を脱ぎすてる。

男に交わることの絶えて十数年を経過した五十歳の女をSは何の躊躇もなく抱きよせる。女は、こりこりとかたい肉を男にうちつけ、その処女のように閉じたかたくなな線を押し破られる痛みに豪毅に耐えて、岩礁に当る荒波のように惜しげもなく自分を砕きつくした。

C寝たきりの八十過ぎの母親

母親の艶やかに張りのあった肌は、年の刻んで行くしぼに軟らかく萎えながら、昔から、通っていた鼻筋が一層細くなり、八十を越えて仰向いてねている半分筋肉の麻痺した顔をさえ、娘は、雪人形のように美しく眺めることがある。

ＡＢＣの引用で注意したいのは、いずれも、「若女の面をかけた老人の舞い手」「八十を越えて仰向いてねている半分筋肉の麻痺した顔」というように、年齢をそのままに描きながら、その様を「窈窕とはなやぐ自分」「くらく美しい虹」「優雅な」「雪人形のように美しく」と形容されていることである。

ここで、「遊魂」における老女表象を比較のために引用する。「遊魂」において、主人公の蘇芳（「蛇の声」の志賀にあたる）が幻想世界で男（娘婿、娘の元婚約者）と交わる時や、幻想的な力（遊魂）が作用する際には、「蘇芳の顔色は、普段の象牙色に静もっている時と違って、砥粉色に張りを持って肉づいているのが、昨日見たのとは十年も若返って、一の字に張った眉が留女（蘇芳の娘：引用者注）の顔を思い出させた」「赤い葡萄酒を薄いガラス器の縁から吸う度に桃色の舌のちろちろ動くのが不思議に、幼女めいたあどけなさに見えて」「十年見なかった間に、一向顔ちがいせず、幾分痩せて若やいだように見える」と形容されている。「遊魂」において美しさは若さと不可分であり、「〈若さ〉＝美／〈老い〉＝醜」の規範から抜け出せていないのに対し、「蛇の声」は後年の「彩霧」に先んじて既に老女の中に「美」を見出す描写が見られるのである。これによって、「蛇の声」を円地文学の中に再度位置づけることが出来るだろう。つまり、「蛇の声」の作品の意義は、志賀や老女たちの描写における、「〈若さ〉＝美／〈老い〉＝醜」の規範の揺らぎを、幻想世界においてではあるが初めて実現させた点にあると考える。

従来「蛇の声」は、『遊魂』三連作の中でも発表当時を除いて注目度

が低く、「遊魂」の方に作品研究が集中しがちであった。それは、主人公が〈遊魂〉によって恋人たちと関係を持ち、幻想の中で自身の女性性を回復させたことが評価されてのことであろう。しかし、倉田の指摘する「〈若さ〉＝美／〈老い〉＝醜」の規範の揺らぎという点では、「蛇の声」は「遊魂」より一歩進み、後年の「彩霧」を予告している。『遊魂』三連作は全て老女のセクシュアリティを俎上に載せていながら、その料理の仕方は異なっており、むしろ「蛇の声」の方に「彩霧」等、円地の後年の作品への方針がより強く現われているといえよう。

おわりに

本稿は、「蛇の声」の価値を明らかにし、円地文学の流れの中に「蛇の声」を位置づけることを目的に、作品の素材と主題を考察してきた。

第一章では、円地が「蛇の声」の素材とした心中事件を検討し、「蛇の声」において実在の事件に依拠した部分と、円地が創作した部分とを明らかにした。円地の創作は、老女の女性性の回復と、困窮した老女たちの憎悪を描くという意図のもと行なわれていると結論した。

第二章では作品の主題を検討した。老女たちの憎しみは自己の存在を軽んじられることに対する抵抗であり、生への意志を強める力となっていると論じた。「蛇の声」の主題は、老女のセクシュアリティにとどまらず、老女の尊厳と生の希求に及んでいると結論づけた。

第三章では、「仮現の光景」の老女表象を分析した。老女の若返りにより美しさや女性性を描写する「遊魂」とは異なり、「蛇の声」では老女を若返らせずに美しさや女性性を表現している。これによって五年後の「彩霧」について倉田容子が指摘する「〈若さ〉＝美／〈老い〉＝醜」のコードの揺らぎが「蛇の声」ですでに見られることを示し、「蛇の声」は「彩霧」等後年の円地の〝老女もの〟の方向性を予告していると論じた。

「蛇の声」は老女表象のあり方において、後の〝老女もの〟につながる重要な作品といえよう。

注

（1）「新潮」一九六九年一月。円地六十四歳の作品。

（2）「新潮」一九七〇年一月。円地六十五歳の作品。

（3）磯田光一は「疑いもなく今月の最もすぐれた作品」（「文芸時評（下）」「東京新聞」夕刊、一九七〇年三月二十四日）と評し、江藤淳は「老境の静謐（ひつ）とほど遠い円地氏の『蛇の声』が一番印象に残った」（「4月の文学（下）」「毎日新聞」夕刊、一九七〇年三月二十八日）と述べている。

（4）齊田春菜「円地文子「蛇の声」論――「老女もの」における少女表象――」「北海道大学大学院文学研究科研究論集」十八巻、二〇一八年十二月。

（5）事件の報道は一九七〇年一月二十一日。「蛇の声」が掲載された「海」四月号（中央公論社）の新聞広告は「朝日新聞」一九七〇年三月八日東京朝刊三面にある。事件報道から「蛇の声」発表まで一ヶ月半ほどに過ぎないが、五十代で流行作家となり多作だった円地がこの間に執筆したとみても不自然ではないだろう。

（6）磯田光一「文芸時評（下）」「東京新聞」夕刊、一九七〇年三月二十四日。

（7）佐伯彰一「文芸時評（下）」「読売新聞」夕刊、一九七〇年三月三十日。

（8）菊池章一「文芸時評　方法としての幻想」「新日本文学」一九七〇年五月。
（9）前掲4。
（10）マジュール・ポリーヌ「円地文子の幻想文学　――その語りの特徴について――」「兵庫教育大学　教育実践学論集」十四号、二〇一三年三月。
（11）前掲4。
（12）倉田容子「一九七〇年代〈老いゆく身体〉――『彩霧』」『語る老女　語られる老女：日本近現代文学にみる女の老い』学芸書林、二〇一〇年二月二十四日。

付記

「蛇の声」「遊魂」の引用は『円地文子全集　第五巻』（新潮社　一九七八年七月）による。引用に際し、ルビは省略し、私に傍線を付した。なお、本稿は京都大学大学院人間・環境学研究科に提出した修士論文「円地文子「蛇の声」論」（二〇二二年一月七日）の一部である。